

[008]障害史研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7420027>

出版情報：障害史研究. 8, 2026-03-30. Society for Disability History Studies (Shōgaishi Kenkyūkai)

バージョン：

権利関係：



活動報告

〔1〕 科研メンバー

○ 研究テーマ

「障害史構築にむけた学際的資料研究 ― 比較史的観点から ―」

(JSPS 科学研究費助成事業・基盤研究 A・24H00104)

○ 研究代表者

高野 信治 (九州大学名誉教授)

○ 研究分担者

赤司 友徳 (九州大学大学文書館・准教授)

大島 明秀 (熊本県立大学文学部・教授)

小林 丈広 (同志社大学文学部・教授)

小山 聡子 (二松学舎大学文学部・教授)

鈴木 則子 (奈良女子大学特任教授)

高久 彩 (九州大学比較社会文化研究院・特別研究者)

瀧澤 利行 (茨城大学教育学部・教授)

東 昇 (京都府立大学文学部・教授)

福田 安典 (日本女子大学文学部・教授)

藤本 誠 (慶應義塾大学文学部・准教授)

細井 浩志 (活水女子大学国際文化学部・教授)

山田 巖子 (論文は山田巖子) (弘前大学人文社会科学部・教授)

山本 聡美 (早稲田大学文学学術院・教授)

吉田 洋一 (久留米大学文学部・教授)

○ 研究協力者

有坂 道子 (京都橘大学文学部・教授)

クウィーラ・ダーヴィット＝ドミニク (David Dominik
CHWILA) (九州大学大学文書館テクニカルスタッフ)

末森 明夫 (日本社会事業大学社会事業研究所・共同研究員)

中村 治 (京都府立大学特任教授)

平田 勝政 (長崎大学名誉教授)

丸本 由美子 (金沢大学法学類・准教授)

山下 麻衣 (同志社大学商学部・教授)

[2026年3月現在]

〔2〕 活動記録

○本科研・障害史研究会

・第18回研究会

2025年7月13日、オンライン開催

(1) 研究報告

高野信治「近世刑事法制史料にみる生活のなかの〈障害〉——永青文庫細川家文書「口書」を素材として——」

〔概要〕

病・〈障害〉は個人的な問題ながら、家族・地域・広域・階層など、生業や社会との関わりをもつ。そのようななかで、「犯罪」と当該期の人々が考えた事案発生があり、それは生活の実態や意識などが背景となる場合がある。かかる点を、藩領で生じた犯罪・紛争などの被疑者や関係者の供述書と、刑罰の決裁過程に係る文書を収録する、熊本藩の刑事法制担当部局（刑法方）作成の年次記録帳簿群「口書」を素材に報告した。

これに対し、本来の生業（農業・職人業・商業など）から宗教者ないしそれに類する生業者となる実態（藩権力や身分集団との関係など）、非人などの身分集団に属するか否かによる当事者（障害者）保護の有無と「犯罪」行為の可能性、身体障害者による木工職人（桶・家具類など）となる動向とその時代的な意味、身体・精神障害者と知的障害者における生業面での前近代と近代の相違、などに関わる質疑がなされた。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第19回研究会

2025年12月7～8日（京都府京都市、オンライン併用）

(1) 史料調査・研究報告（12月7日、京都府立大学）

・午前 史料調査（京都府立京都学・歴彩館）

田辺（舞鶴）藩の谷口家資料にある裁判記録など

の調査

・午後 研究報告（文学部）

a) 赤司友徳「監獄のなかの精神障害者——1900（明治33）年「精神病患者監護法」前後における処遇と責任の再編——」

概要：明治期の監獄が精神医療体制の未整備な中で精神障害者の収容場所として機能していた実態に着目し、1900年精神病患者監護法制定後もなお、身寄りのない刑余精神障害者が監獄に滞留し続けた法の建前と現場の乖離を明らかにした。

b) 中村治「精神障害者と暮らしてきた町・岩倉」『精神障害者と暮らしてきた町 岩倉』（解放医療対策委員会）を踏まえ、京都・岩倉地域における精神疾患の人々と地域社会との関係が、近世から現代に至るまでどのように形成され、変容してきたかを整理し、翌日の巡見準備報告とした。

※研究会終了後に打ち合わせ（運営の方針・計画）

(2) 巡見（12月8日、京都市左京区岩倉地区）

精神医療史跡の巡見

※第19回研究会の内容は、本誌に論考・記録を掲載した。

・第20回研究会

2026年3月28日、オンライン開催

(1) 研究報告

・樋原祐二「医療が未発達な時代における障害は何モデルか？」

・平田勝政「国民優生法と障害者の人権」

※第20回研究会報告の概要は次号掲載予定である。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

○学会報告

- 2025年7月27日 日本仏教総合研究学会第7回例会シンポジウム「鎌倉仏教と「呪術」、小山聡子「親鸞の子孫と「呪術」、於・慶應義塾大学
- 2025年9月7日 日本古文書学会第57回学術大会、細井浩志『『暦林問答集』の清原良賢本系写本について——慶應義塾大学所蔵文明写本と「大永三年」写本の紹介——、於・北海道大学（札幌）
- 2025年9月18～20日 日本近世文学会国際研究大会開催、福田安典、テーマ「草双紙」ラウンドテーブル、於・ケンブリッジ大学
- 2025年11月8日 日本精神医学史学会、赤司友徳「九州大学精神科診療記録の概要：歴史的意義とアーカイブズ構築への展望」、於・立教大学池袋キャンパス
概要：本報告は、九州大学大学図書館が保有する昭和年間の精神科診療録の概要を紹介し、そこから見えてくる資料に即して近代精神医学の受容過程を示した。また、この診療録の保存・活用に向

けた今後の展望も合わせて論じた。

- 2025年11月30日 日本学校保健学会第71回大会・渉外委員会企画パネルディスカッション「学術活動における「多様性 (diversity)」「公正性 (equity)」「包摂性 (inclusion)」を考える」、瀧澤利行による企画・司会
- 2026年3月15日 日本口承学会例会、「シンポジウム 学史としての学生民俗学研究会」、山田巖子「地方大学における民俗学運動——弘前大学と都留文科大学のサークルを手がかりに——」、オンライン概要：1950年代の民話サークルから始まり1970年代には全国に広まった学生たちの民俗学と関わる運動を学史として位置づける試み。発表では、1960年代に始まった地方の大学の民俗学サークルを事例に、学生たちが大学のカリキュラムの外にあった民俗学を選び取ってゆく内的要因と外的条件について明らかにした。

○研究会報告

- 2025年6月14日 時間学公開学術シンポジウム2025（山口大学時間学研究所主催）「陰陽道と時間」、細井浩志：はじめに——陰陽道研究と時間学との関係、於・活水女子大学（長崎市）
- 2025年9月13日 佐賀医学史研究会、吉田洋一「久留米地域の医学と九州医学専門学校」、於・久留米大学御井図書館
概要：久留米藩の医学と、明治時代以降の同地域の医療事情及び九州医学専門学校（昭和3年）創立の経緯を報告した。
- 2025年12月6日 シンポジウム「幽霊の歴史文化学——幽霊大国タイからの報告」、小山聡子「怨念対 呪術——タイの「ピー」は日本の「幽霊」よりも怖いか」於・二松学舎大学、二松学舎大学文学部歴史文化学科・Department of Cultural Promotion Thailand 主催
概要：本シンポジウムは、タイの文化省のプロジェクト「UNLEASHING THE ART OF THAI GHOSTS」

の一環として行われた。

- 2025年12月14日 古代寺院3 DGIS 科研主催・国分寺市教育委員会後援の古代寺院3 DGIS 科研研究集会 #4「国分寺伽藍配置を考える——遺構・地形・景観と設計思想——」、藤本誠「仏教思想からみた古代寺院の伽藍配置」於・都立多摩図書館
概要：本報告では、印度・西域・中国・朝鮮半島における寺院伽藍と関わる仏教思想について仏典も含む諸史料から検討し、その上で古代日本の寺院伽藍の特質についての考察を試みた。
- 2025年12月20日 上廣倫理財団助成事業「『近世人の心性と教養』に関する研究プロジェクト」第5回研究会、高野信治「民衆の学びと〈障害〉への眼差し——益軒養生論・石門心学からの検討——」、於・大黒屋（福島県白河市）
概要：近世民衆の学びを期待する貝原益軒の養生論や石門心学の社会道徳論を素材に、近世日本の障害をめぐる認識の一端を考えた。

○講演

- 2025年3月23日 福田安典「平賀源内と浅草」、於・浅草寺
- 2025年7月21日 眞木神社例祭講座、吉田洋一「江戸時代の日記について」、於・久留米水天宮
概要：眞木和泉守『南僊日録』刊行を画期として、江戸時代の日記及び記録類の概要を述べた。
- 2025年8月4日 Unleashing The Art of Thai Ghosts Koyama Satoko「Sacred Culture in Japan」(於・Mahidol University)
概要：タイ国支援事業「UNLEASHING THE ART OF THAI GHOSTS」の一環として行われた。
- 2025年9月1日 青森市民スクール、山田巖子「津軽地方に伝わる鬼の伝説——伝説の背景と文脈——」、於・青森市中央市民センター
概要：津軽地方の鬼伝説に対して、儀礼化や図像化、山神信仰や寺院との関わりなど多様な文脈から読み解いたもの。
- 2025年9月5日 鈴木則子「北斎が描いた江戸の病」、生駒市生涯学習課・図書館主催「働く大人の週末ゼミ」、於・生駒市
- 2025年11月2日 倉敷市・二松学舎大学連携講座、小山聡子「鬼退治の歴史と桃太郎」、於・倉敷市立美術館
- 2025年11月8日 中村治「地域住民と患者——奄美・沖縄と岩倉の場合——」、日本精神医学史学会、於・立教大学
- 2025年11月9日 満徳寺 報恩講、小山聡子「親鸞聖人と現世利益」、於・満徳寺
- 2025年11月29日 第126回日本医史学会総会・学術大会市民公開講座、鈴木則子「ジェンダー史から問う医療の歴史～幕末期江戸の中條流「女医者」再考」、於・奈良女子大学
- 2025年12月6日 鬼シンポジウム in ふくちやま 2025 (世界鬼学会・鬼師の会主催)、小山聡子「鬼に魅せられた日本人——恐れとの共生1000年史」、於・大江町総合会館イベントホール
- 2025年12月7日 福田安典「江戸のマルチクリエイター 平賀源内」、於・トヨタ博物館
- 2026年1月31日 川崎市教育委員会主催の史跡橘樹官衙遺跡群史跡指定10周年記念事業・橘樹官衙遺跡群・下寺尾官衙遺跡群同時国指定10周年記念シンポジウム「古代東国における仏教の受容と寺院」、藤本誠「古代地方における仏教の広がり」、於・川崎市役所本庁舎
概要：古代日本の地方社会では、七世紀後半になり仏教が地方豪族層に広がった。本講演では地方豪族層の素材として山上碑と金井沢碑を考察し、二つの建碑には天皇への仕奉を主張する政治的な意味があったこと、また八世紀後半から九世紀にかけて村落レベルにまで仏教が広がったことなどを指摘した。
- 2026年2月8日 2025年度講演会(「古文書調査の現場から」、吉田洋一「古文書調査での発見と驚き」、於・大野城まどかぴあ
概要：2025年度地域文化財展(大野城心のふるさと館)の関連イベントとして、今年度参加した史料調査の概要などを解説した。
- 2026年3月7日 先人顕彰館民俗学セミナー、山田巖子「日本民俗学の歩みと瀬川清子の業績と評価」、於・花輪市民センター講堂
概要：日本における民俗学と民族学の関係を解きほぐし、鹿角出身の民俗学者瀬川清子の仕事を位置づける。

○講座・解説

2025年9月26日 小山聡子「白目を剥いてバイクに相乗りする妊婦——タイのピーが日本の幽霊と異

なるところ」、映画パンフレット『サッパルー！街を騒がす幽霊が元カノだった件』

○展示企画

2025年12月17日～2026年1月13日 「写真展 The Homeland ～故郷へ帰還するシリア難民～」(山本聡美参画。早稲田大学高等研究所「人新世と人文学」

プロジェクト及び早稲田大学総合人文科学研究センター「拡大するムスリム社会との共生」部門共催)、於・早稲田大学内ワセダギャラリー

○調査

- ・2025年8月2～5日 小山聡子、タイ国支援事業「UNLEASHING THE ART OF THAI GHOSTS」の一環として、マヒドン大学のAphilak Kasempholkoon氏とタイにて祠の共同調査
内容：タイと日本の霊魂に対する扱いの相違について検討した。
- ・2025年8月28～29日 東昇、大洲市立博物館、大洲藩領大谷村三瀬家文書の調査
概要：障害史研究に関わる史料として、障害・病気・困窮に関する記述を含む文書を中心に確認・撮影を行った。主な史料として、弘化4年(1847)「御順領諸事控帳」を取り上げ、藩主巡見時におけ

- る難渋者および孝子褒賞に関する記録を調査した。
- ・2025年8月30日～9月7日 藤本誠、ウズベキスタンに初期仏教遺跡等の調査
内容：大乘仏教の成立と関わる中央アジアの1～3世紀(クシャーン朝)の仏教遺跡の巡見を行った。初期仏教の伽藍プラン及び菩薩像について調査を行った。また合わせて、イスラム教における障害観についての聞き取りを行った。
- ・2025年10月16日～18日 大島明秀、於・長崎(長崎歴史文化博物館、長崎県美術館、長崎原爆資料館、長崎市立図書館)
概要：障害史資料を調査・収集。

〔3〕研究短報

○赤司 友徳

- ・今年度も医療ヘルスケアに関する資料の収集・保存・公開に関する状況を整理し、報告や論文執筆を行いつつ、九州大学内外における当該記録の現状調査を行った。
- ・来年度は社会保険大牟田天領病院が所蔵する三池炭坑粉塵爆発事故の患者記録(高次脳機能障害関係)の調査および目録作成等を実施する予定である。

- ・戦後最大の労働災害である三池炭坑粉塵爆発事故(1963年)に関し、社会保険大牟田天領病院には、後に高次脳機能障害と認定された多数の患者記録が保管されている。来年度は、これらの半世紀以上にわたる貴重な長期経過記録を整理・目録化し、当該分野の医学的知見の蓄積および歴史的検証に資する基盤整備を行う。

○大島 明秀

『荷を引く獣たち——動物の解放と障害者の解放』という文献から、「動物をもって障害者(人)を表象してきた歴史」や、「障害を持った動物の歴史」という着想を得た。長崎で調査した写本「紅毛馬書」は、徳川吉宗の命で阿蘭陀通詞今村源右衛門がオランダ

人からの聞き取りや蘭書の抄訳をまとめたもので、構成の一部は、ファン・クール『あらゆる病気や事故から馬を救うための救済策または有益な治療法』(Pieter Almanus van Cour: Toevlugt ofte heylsame remedien voor alderhande siektens en accidenten die

de paarden soude konnen overkomen) からの訳出である。ファン・クールの原典を確認すると、障害を持った馬についての記述があることが分かった。そこで、源右衛門の和訳ではどうなっているかを確認

した結果、該当箇所は訳していないことが分かった。その他、「原爆」による障害についての研究視座の必要性も得た。

○小林 丈広

- 研究活動としては、学生の協力を得て、障害史に関わる史料収集や年表づくりを行った。
- 『滋賀県史』戦前資料編の編纂に関わり、社会・福祉部会の運営、資料収集、原稿作成などに携わった。自治体史の中に政治や経済、文化などと並ん

で「社会・福祉」部門を設ける事例はまだ少ないので、今後のモデルになるように取り組みたい。来年度にかけて、戦前資料編の編集に取り組みむと同時に、戦後資料編の資料収集に着手する予定である。

○小山 聡子

- 古代から近世における、奇形（人・動物・魚等）に関する史料を収集し、調べた。
- 中世を中心に、病気治療がどのようになされたのかを史料に基づき分析した。
- 上記「活動記録」掲載の講演（「Sacred Culture in Japan」、「鬼退治の歴史と桃太郎」、「親鸞聖人と現世利益」）、シンポジウム報告（「怨念 対 呪術——タイの「ピー」は日本の「幽霊」よりも怖いか」）、講演（「鬼に魅せられた日本人——恐れとの共生1000年史」）、解説（「白目を剥いてバイクに相乗りする妊婦——タイのピーが日本の幽霊と異なるところ」）、調査（タイでの祠調査）などを行った。
- 論文
小山聡子「14世紀における疫鬼と疫病治療」大形徹・池内早紀子・山本優紀子編『鬼系の病因論——疾病・疫病観の起源を探る』臨川書店、2026

年3月

- メディア取材

『読売中高生新聞』（2025年6月6日）の「講義の鉄人」コーナー「未知への恐怖 和らげる手段」、『毎日新聞』（2025年9月22日）朝刊文化面の「幽霊「ピー」読み解くシンポ」の取材に応じた。

また、NHK 総合「歴史探偵」（2025年10月22日）の「平安の浄土信仰“終活”ブームの謎を追え！」に出演した。

2025年12月6日に開催された「鬼シンポジウム in ふくちやま2025」での講演内容やシンポジウムの様子が、『京都新聞』（2025年12月7日）で「「鬼文化」守り、発展を——福知山でシンポ イメージ形成背景探る」、『両丹日日新聞』（2025年12月10日）で「鬼や妖怪について考える」とする題で記事になった。

○末森 明夫

【査読論文】

- 末森明夫 (2025) 「手話言語を対象とする語彙統計学にみる課題」『リベラルアーツ&マイノリティ』2 : 1-38.
- 末森明夫 (2025) 「手指図像景観研究の地平：言語景観研究・記号景観研究における指文字図像の連環布置」『手話学研究』34 (1) : 12-29.

【予稿】

- 末森明夫 (2025) 「鏡像語『今年』と『聾啞』にみる語順相反機序の比較」『第51回日本手話学会大会予稿集』9-10.
- 末森明夫 (2026) 「聾自認にみる文化的雑食：聾恨を回避するための消極的方略」『ろう教育科学』67 (2) : 39-41.

【記事】

- 末森明夫 (2025) 「日本型「liberal arts と minority の接続」における『百学連環』と『建築進化論』の投影」『リベラルアーツ&マイノリティ』 2 : 131-135.

- 末森明夫 (2025) 「彷徨する《同好》と《啞》」『聾啞史会報』 82 : 1.
- 末森明夫 (2025) 「聾啞史・手話学にみる学術用語邦訳の射程」『聾啞史会報』 83 : 4-7.

○鈴木 則子

- 2025年11月29・30日に第126回日本医史学会総会・学術大会を大会会長として開催した。会場は奈良女子大学、大会テーマは「医療とジェンダーの歴史」。会期中、29日に「ジェンダー史から問う医療の歴史～幕末期江戸の中條流「女医者」再考」というタイトルで講演を行った。
- 2025年12月8日、奈良女子大学にて「アカデミック・Week」企画（連続講演会）のうちの1回として、奈良女子大学・奈良教育大学構成員を対象とするハイブリッド講演を行った。旧奈良女子高等師範学校の史料調査に基づいて、女高師の翼賛的性格について論じた。女高師史料には障害児教育関係史料も含まれており、今後も史料調査を継続する予定である。
- 2025年12月21日、ジェンダーの日本通史出版に向

けての準備研究会を東京大学にてハイブリッド開催した。編者の一人としてジェンダーの通史に於ける近世史の位相について説明報告を行った。現在の日本近世史研究に求められるジェンダー視点について確認する作業は、自身が行っている近世の障害史研究におけるジェンダー視点について再考する機会ともなった。この研究会を通じて、今後の障害史研究にとって重要な論点となるであろう「感情史」や「インターセクショナリティ」の視点も深めていきたいと考えている。

• 講演抄録

日本医史学会学術大会市民講演会講演抄録「ジェンダー史から問う医療の歴史～幕末期江戸の中條流「女医者」再考」『日本医史学雑誌』71巻3号、2025年9月

○高久 彩

2025年度は、家族の入院・介護に直面し、改めて「障害とは何か」「老いとは私たちにとって何か」という問いに向き合う機会となった。「障害」と「老化」は、身体機能や認知機能の低下、慢性疾患などと重なり合う点も多いが、現行の制度的枠組においては、「障害者福祉制度」と「介護保険制度」は別個の制度として構築され、それぞれ対象・給付・思想が異なっている。例えば、高齢者の「要介護度認定」は、「障害認定制度」と類似しつつも、「老化」を前提にした身体機能や認知機能、日常生活動作を数値化して段階化する制度である。従って、障害者である人が高齢になると、制度上は高齢者向け制度に優

先的に位置づけ直され、制度的再分類が行われる。制度的分断を架橋する試みも進められているものの、これまで享受していた支援やサービス内容が変化し、それによって対象者の生活が不安定化するとともに、家族へのしわ寄せや負担の増加など、身体的・精神的・経済的に様々な問題が生じる場合もみられる。今後の研究では、「障害史研究」の観点から、「障害」や「老化」に関わる分類に注目しつつ、年齢や身体機能、生産性などに基づいて身体がラベリングされることによって生じる多角的な問題にも目配りしたいと考えている。

○高野 信治

- データベースとしての近世・近代の障害史関連目録（『障害史研究』6号掲載の補充版）の作成に向け研究文献の整理を遂行中。
- 以前に書いた拙稿「鍋島猫騒動——御家騒動の物語化と怪異性——」（福田千鶴編『新選 御家騒動下』新人物往来社、2007年12月）が、今次、小松和彦監修『怪異・妖怪学コレクション』の1冊である木場貴俊編『歴史のなかの怪異・妖怪』（河出書房新社、2025年5月）に採録された。本号「研究短報」に大島明秀がいう「動物をもって障害者（人）を表象してきた歴史」との着想にすり合わせると、人と動物（猫）をめぐる怪異の心性は、障害に対する心意に繋がる可能性も感じる。
- 刊行成果物
「障害認識の画期を問えば：近世の位置を念頭に」（『九州史学』200号、2025年5月）
「障害をめぐる歴史研究の観点：日本史の立場から」（池田嘉郎・北村陽子編『障害者と歴史学』（史学会シンポジウム叢書）山川出版社、2025年11月）
概要：上記2点は、本科研のテーマでもある障害

の歴史研究の方法論や観点について、筆者なりに整理し提示した仕事である。

「貝原益軒の養生論をめぐる考察——記述法と社会化——」（『市史研究ふくおか』21号、2026年3月）
「貝原益軒の〈養生〉認識——養生論との関連から——」（『障害史研究』8号、2026年3月）

概要：上記2点における貝原益軒・養生論やそれに胚胎する障害認識という観点は、瀧澤利行の研究に示唆をうけた。これに関連し、「活動記録」に載せた上廣倫理財団助成事業「『近世人の心性と教養』に関する研究プロジェクト」第5回研究会では、学びを重視する益軒という観点を踏まえ報告した。

「書評 荒武賢一郎・野本禎司編『仙台藩の組織と政策』岩田書院、2025年」（『東北アジア研究』〔東北大学〕30号、2026年3月）

概要：私の研究テーマの一つである近世政治社会（武家社会論・藩研究）をめぐる書評だが、身分制のなかでの心身の資質と「家」当主の関係は、障害の歴史研究としても大事な考察対象だと思う。

○瀧澤 利行

- 今年度は本科研費研究分担の他に、研究代表者として「近代日本における保養文化の形成とその思想的系譜」（基盤研究C：25K13361）、分担研究者として「近世期日本の養生書における翻刻・解題の再検討と新たな翻刻の作成に関する研究」（基盤研究C：研究代表者 趙菁：24K03656）に関わり、それぞれ関連はするものの、研究の角度が異なるために、視点の切り替えがやや難しく感じた。それに何といても年度前半は活動記録3）の史学会シンポジウム叢書に参加させていただく機会を得て、自らの研究をまとめるような仕事を試みる事ができた。この流れで、障害史研究においても、近代日本における社会医学研究史の中での優生思想を取り上げる仕事に着手できた。
一方、もうひとつの専門分野である公衆衛生学・学校保健学の領域では、日本公衆衛生学会の事業

である『公衆衛生学事典』の歴史領域の執筆に着手した。また2025年11月には日本学校保健学会第71回大会において渉外委員会企画パネルディスカッションとして「学術活動における「多様性 (diversity)」「公正性 (equity)」「包摂性 (inclusion)」を考える」を企画・司会を担当し、障害学を体系的に論じている東京大学大学院教育学研究科の星加良司氏をパネラーの一人として招き、社会のマジョリティ性が障害者をどのように排除しているかを学術活動の中で考える機会を得たことは大いに触発された。例えば、多くの学術活動が紙媒体を用いていることが、視覚障害の点から考えるとまさにマジョリティ性の壁として立ちはだかっているという指摘には傾聴の価値があった。

- 刊行物

1) 瀧澤利行：「養護教諭の歴史——学校看護から養

護教論への道のり——」(池添志乃編『学校における養護活動の展開』2025年4月、ふくろう出版、10-21頁。

2) 瀧澤利行：「日本における保養の文化と思想——「鍛錬」と「愛護」の振幅と変容——」総合社会学研究(総合社会学会)、36・37号、1-15頁。2025年6月。

3) 瀧澤利行：「健康思想・衛生思想の展開における「障害」理解の思想と構造——「衛生」は「障害」

をいかに捉えてきたのか」(池田嘉郎・北村陽子編『障害と歴史学』(史学会シンポジウム叢書)2025年11月、山川出版社、51-88頁。

4) 瀧澤利行：「近代日本社会医学研究史概観(1)」『障害史研究』(障害史研究会)、第8号、2026年3月。

5) 瀧澤利行：「戦争と衛生」『教育学研究室紀要』(國學院大學教育学研究室)、第60号、2026年3月。

○中村 治

上記「活動記録」記載の講演のほか、中村治編著『精神障害者と暮らしてきた町・岩倉』(開放医療対

策委員会、2025年3月31日)の内容に関する講演を何度か行った。

○東 昇

生瀬克己『近世障害者関係史料集成』(明石書店、1996年)にみられる内容や地域的な史料の偏在を解消するため、また、東昇『近世障害史料目録』(『障害史研究』別冊、2024年)の続編として、近世障害史研究の基礎資料となる史料群の拡充を図った。

具体的には、各地に残る孝子褒賞史料や刑罰記録を対象に、障害や病に関する表現の収集を行った。

丹後田辺藩に関しては、綾部市資料館所蔵の「田辺藩裁判資料」を調査対象とした。さらに、幕府編纂の「続編孝義録料」、松浦静山『甲子夜話』、ならびに京都近郊の村落文書である「今江家文書」などを調査し、これらの史料から本研究に関連する記録を抽出した。以上の調査成果をもとに、近世障害史研究に資する史料の目録を作成した。

○福田 安典

・2025年9月に『儒医の文芸』(汲古書院)を上梓した。

本書の内容と、当該科研と関わる点は以下である。

障害史と医学史とは切っても切れない関係にある。その状況に於いて医学側の倫理道徳は「医は仁術」と語られることが多い。即ち医学の倫理的なバックボーンに「儒学」を置くものである。ゆえに「儒医」という言葉が時には美しく語られるに至る。

ところが、この「儒医」という言葉は本来矛盾する概念の結合である。儒教が施政者側の支配原理に使われる場合は、「儒」は学問体系の最上位に位置する。対して「医」は方技として下位に属する。その両者が対等に並置されることはない、というのが本義である。

また、「医」は「醫」とも「醫」とも書かれる。その字体の示す通り、「醫」を「西」(薬品)を扱う職種であり、「醫」は「巫」と共存する陰陽道のパートナーである。ゆえにまずは陰陽道とつながる古代医学を「医陰(いおん)」と定義したうえで、為政者が推し進めた思想統制により「儒医」に代わる過程を検討すべきであるが、従来の儒医研究にこの視座はなかった。

むしろ「儒医」という言葉が余りにもイージーに使われ過ぎている。江戸時代に於いては儒学や四書五経は基本的素養であり、医学に関しては国家試験や資格試験があるわけではなく、医学のまねごとをした素人でさえ「儒医」を僭称することが可能となった。誰も批判できない。

近代以降、「儒医」を名乗る同時代の医師がいなくなると、学術論文やエッセーなどで勝手に前時代の医師を「儒医」と呼ぶことが一般化され、ます

ます如上の簡単な視座は顧みられなくなっている。本書を提示する所以である。

○藤本 誠

- ・上記「活動記録」記載の初期仏教遺跡等の調査（ウズベキスタン）をおこなった。
- ・2025年度は、2023年度に刊行された「古代日本仏教説話の疾病（障害）関係史料目録」及び「中国疾病（障害）関係表現史料目録（六朝隋唐期）」を修正・増補するために、日本中世前期の仏教説話集のデータ化、及び唐代の中国仏教説話の読解を継続して行った。

○論文

- ・藤本誠「辺境と宗教」（川尻秋生・十川陽一・藤本

誠編『律令国家の辺境と交通——揺れ動く南北の境界と領域——』八木書店、2025年5月）

- ・藤本誠「日本古代の疾病（障害）者と地域社会」（池田嘉郎・北村陽子編『障害者と歴史学』山川出版社、2025年11月）

○史料紹介

- ・藤本誠・市岡聡・内田准心・岡田文弘・佐野誠子・柴田憲良・曾根正人・張禧睿・吉田一彦編「『法華伝記』巻九（一～十二）校訂・訳注稿」（『史学』95巻1・2号、2026年3月）

○細井 浩志

2025年度の障害史関連の学術研究活動は、コーディネーターも務めた時間学公開学術シンポジウム

「陰陽道と時間」および日本古文書学会第57回学術大会報告である。詳細は上記「活動記録」参照。

○山田 巖子

・概説

山田巖子「見えない世界との交信——津軽地方における民間巫者とその「知識」——Communication with a world that cannot be seen: folk shamans of the Tsugaru region and their knowledge」, サワダ・ハンナ・ジョイ編『日本語と英語で読む津軽の文化遺産 An Introduction to in Japanese and English The Cultural Heritage of Tsugaru』2026年3月、pp.126-

144、弘前大学出版会

概要：盲目の宗教者であるイタコの巫業のうち、オシラサマの祭祀と子どもの供養を取り上げ、信仰者からの聞き書きや供養行事から、この世と見えない世界とをつなぐ巫女の「知識」が地域住民にも浸透している状況を論じた。外国人留学生向けの津軽学の概説書。

○山本 聡美

①須弥山と捨身図像に関する考察

本科研費の研究課題に取り組む中で見えてきたテーマが、「病をめぐる互惠の関係」である。平安時代末期の浄土僧、永観（一〇三三～一一一一）による「病は善知識なり」との成句（三善為康編『拾遺往生伝』所収の永観伝より）が端的に示しているよ

うに、仏教の修行者にとって、自他の病は自らを悟りに導く善智識として位置づけられる。自ら病身を得ること、また目の前の病者に向き合うこと、このことは、身体の有限性を知り身命への執着を減する契機として修行の道しるべとなる。このような観点から、仏教説話画に登場する病の図像を分析するう

ちに、それがしばしば他者救済のための捨身の図像と結びついていること、さらには捨身行が実践される場としての須弥山図像と深く結びついているという点に思い至った。そこで2025年中は、国内外で自身が行った学会発表や公開講座のほぼ全てにおいて、須弥山や捨身を主題とした説話画について取り上げることとなった。これに関連するものは、大正大学日本文学科特別企画・古典へのいざないプロジェクト、ハーバード大学ライシャワー日本研究所主催の公開セミナー、ハーバード大学 East Asian Art Program・同ライシャワー日本研究所・早稲田大学総合人文科学研究センター角田柳作記念国際日本学研究所共催のシンポジウム、コロンビア大学 the Mary Griggs Burke Center for Japanese Art、同 Donald Keene Center for Japanese Culture、早稲田大学 SGU 国際日本学拠点共催のワークショップ、シンポジウム（第15回 源氏絵データベース研究会 国際シンポジウム「源氏物語の源流／源氏物語絵巻の源流」、於早稲田大学）、チューリッヒ大学 Institute of Asian and Oriental Studies、チューリッヒ大学 Institute of Asian and Oriental Studies 主催国際シンポジウム、北京大学中国語文学系・中国古典学研究平台・早稲田大学総合人文科学研究センター角田柳作記念国際日本学研究所・SGU 国際日本学拠点共催の国際シンポジウム、ハノイ・タンロン大学にて開催された国際シンポジウム、清華大学外国語文学系などでの報告・講演などである。

②写真展「The Homeland ～故郷へ帰還するシリア難民～」開催

2025年12月17日～2026年1月13日まで、早稲田大学内のワセダギャラリーにおいて「写真展 The Homeland ～故郷へ帰還するシリア難民～」を開催した（早稲田大学高等研究所「人新世と人文学」プロジェクト及び早稲田大学総合人文科学研究センター「拡大するムスリム社会との共生」部門共催）。本展は、ドキュメンタリー写真家である小松由佳氏（早稲田大学総合人文科学研究センター・拡大するムスリム社会との共生部門の招聘研究員）が実施したシリア取材、シリア難民取材に基づく写真展である。2024年12月のアサド政権崩壊から1年の節目、また2025年7月には小松氏が『シリアの家族』（集英社、

2025年11月）にて第23回開高健ノンフィクション賞を受賞し、11月には受賞作が発刊となったこともあり、本展にも大きな反響が寄せられた。

2008年、砂漠のオアシス都市パルミラ取材に赴いた小松氏は、そこでラクダの放牧を生業とする60人の大家族アブドゥルラティーフ一家と出会った。やがてその一員のラドワン・アブドゥルラティーフ氏と結婚、小松氏も家族の一人となる。折しも、2011年以降のシリアは内戦状態となり、ラドワン氏も国外への避難を余儀なくされた。小松氏は、トルコ、イギリス、そして日本へと離散した一家を写真に撮り続け、2022年には親族訪問ビザを得て、内戦下のパルミラ取材も敢行。2024年12月にアサド政権が崩壊した直後にもシリアへ入国し、混乱の渦中で社会の再建を模索する人々の姿を撮影し続けている。現在、多くのシリア人が故郷を目指して帰還の途にあるが、政治的安定という国家的課題だけでなく、個人生活の正常化に不可欠な、建物の再建、インフラの整備、コミュニティの再編、文化の継承、経済の復興にはまだまだ多くの課題が山積している。これらの現実直面する人々を、小松氏は、家族として、写真家として、独自の距離感から撮影する。

本科研費の研究課題に関連する観点として、シリアでは内戦中もそして現在も、砲撃や地雷といった兵器による外傷、さらには独裁政権下で長期化した相互監視社会で生きるストレス、非人道的暴力によって、心身に傷を負った多くの人々が存在する。小松氏はそのような人々への取材や撮影を丁寧に行い、本展においても写真や映像を通じてその実態を伝えた。自宅への空爆で5歳の息子と自らの右足を失った女性。義足とともに撮影された彼女のポートレートに、戦禍が人間から奪うもののあまりの大きさを目の当たりにし言葉もない。私たちが生きる世界に現実のものとして存在する痛み／傷み／悼みを受け止め、共生するためのどのような思想を、我々は獲得できるのか。果てしない問いを突き付けられるような写真展であった。

③刊行物

1) 書籍

共著『日本中世の宗教世界』（勉誠社、2025年6月）
共著『いくさと物語の中世 第二集』（汲古書院、

2025年8月)

2) 論文

- 「[表紙解説] 高野山曼荼羅(二幅、米国・ハーバード大学美術館蔵／東京藝術大学蔵)」(『仏教芸術』

15、2025年9月)

- 「建礼門院と宣陽門院——六道を遍歴する女院の系譜——」(『日本歴史』932、2026年1月)

○吉田 洋一

真木和泉守研究会編『南僊日録』巻1～巻5、水天宮(久留米市瀬下町)、2025年、吉田洋一監修

概要：真木和泉守保臣による水田(福岡県筑後市)蟄居十年間の日記。